

カネミ油症三〇年目の現実

語られなかった「環境ホルモン」 人体実験

ルポライター・明石昇二郎

〔『技術と人間』一九九九年四月号掲載〕

事件発生から三〇年が過ぎた今、「環境ホルモン」問題の浮上とともに、カネミ油症事件の「その後」が注目されている。現在、環境ホルモンがヒトの健康と将来にどのような影響を及ぼすのかをめぐり、さまざまな立場の専門家たちがそれぞれの立場で、まるで他人事のような論争をくりひろげているが、そんな彼ら——行政マンや科学者、企業人、そして大マスコミの記者たち——は、これから紹介していく事実を果たしてどこまで知った上でモノを語っているのだろうか。「人間への影響が確認されたわけではない」と嘯く前に、油症被害の徹底的な調査が今、望まれる。

闇に埋もれた

「環境ホルモン」 人体実験

一九七七（昭和五二）年一〇月五日に福岡地裁で言い渡されたカネミ油症福岡民事訴訟第一審の判決文の中に、こんな記述がある。

「油症は、合成化学物質による新しい疾病であるため、各方面での研究治療にもかかわらず、いまだにその病理機序及び治療方法の解明が十分にされておらず、将来の見通しも明るくない……」

それから二〇年が過ぎた現在、その状況に大差はない。

「何であるの時、油症患者が言ったことを国や学者や新聞記者は真剣に取り上げてくれなかったんやろう思うて、腹が立って腹が立ってしようがないき。あの時、私は肛門の開いていない子供が産まれていることも言った。それから、患者の間で乳ガンが多いことも言った。ホルモンが冒おかされていることも言った

し、いろんなことをずいぶん言った。それなのに、相手にされなかった。あの時、油症患者の言ったことをもつと真剣に取り上げてくれとつたならば、日本の国が危険な化学物質でかくも無残に汚染されずに済んだではなからうか。しかしそのことを伏せるために今、国が何て言ってるかいうたら、油症患者に『金を返せ』としか言っていないでしょうて……」

「カネミ油症」事件の被害者、矢野トヨコさん（七五歳）の言葉である。

わが国における一大食品公害事件であるカネミ油症事件は、今を溯さかのぼること三〇年前の

一九六八（昭和四三）年、

「皇后陛下もカネミ油を食べてるし、美容と健康にいい」

「コレステロール減少に最高の効果がある」などと宣伝されていたカネミ倉庫製の食用米ぬか油に、PCBとダイオキシンの一種「ポリ塩化ジベンゾフラン」（PCDF）が混入していたために発生した。つまり、健康食品だと思っていた油が、よりによって猛毒で汚染されていたのである。

この事件の被害者は、西日本地方を中心に一万四〇〇人以上にも上ると言われているが、そのうち症状の重かった一八七一人だけが、国の意向で定められた油症診断基準により「油症患者」と認定された。そんな油症患者たちに真っ先に現れた症状は、

①全身の皮膚や生殖器にまで及ぶ、吹き出物や炎症。さらに吹き出物から出る膿が強い悪臭を放つ。

②皮膚や爪、歯茎への黒い色素沈着。

③全身の倦怠感けんたいや頭痛、眩暈めまい、月経異常、肝機能障害。

④性ホルモンを分泌する「副腎皮質」の異常

など。油症患者の中からは、急性心不全で亡くなる中学二年生の男の子や、将来を悲観して自殺する人などが相つき、当時のマスコミはこぞって「油症患者の悲劇」を書き立てたのだった。

そして、事件発生から三〇年の年月が流れ

た。被害者の高齢化も進み、亡くなった油症認定患者もすでに三〇〇人を超えている。マスコミに「カネミ油症」の活字が載ることもほとんどなくなり、世界に例を見ないほど大量のPCBを「食べて」しまったという前代未聞の食品中毒事件も、今や「遠い過去の話」で「すでに終わった話」だとして、人々の記憶からも完全に忘れ去られようとしていた。しかし、である。

事件はまだ、何も終わってはいなかった。油症の原因物質であるPCBとPCDFが、生物の内分泌や生殖機能に重大な悪影響を与え、やがては人類をも滅ぼしかねないとされるあの毒物「環境ホルモン」(内分泌攪乱化学物質)だったからである。しかも、油症による健康被害は自分の子供はおろか、二一世紀を生きる孫の世代にまで及んでいた。

にもかかわらず、海外発の「環境ホルモン」情報によって日本中が浮き足立つ中、自分の国ですでに現実の話となっていた「ヒトへの環境ホルモン被害」の実態に、世間の関心が向けられることはなかった。そして「福祉国家」日本の片隅で、差別を恐れるあまり、被害者でありながらもその被害の苦しみを訴えることすらできず、沈黙を強いられて生きるカネミ油症患者たちへの救済は、今日に至るまで等閑にされ続けている。

今なお続く

「黒い赤ちゃん」の悪夢

カネミ油症事件発生当初、油症患者の母親たちから「黒い赤ちゃん」が続々と産まれている——というショッキングなニュースが全国を駆け巡ったことがある。胎盤を通じて伝わったPCBやPCDFが、赤ちゃんの皮膚にまで色素沈着を引き起こしたのだ。この症状、黒い色素を消す酵素がPCBなどの持つホルモン攪乱作用の影響を受けたゆえのことではないか——と見られているが、そのメカニズムの真相はいまだ解明されていない。

しかし事件から三〇年が過ぎた今、そんな「赤ちゃん」たちも二〇代後半から三〇代の

大人となり、当然、結婚している人もいる。

「今回、人さまに初めて話すことなんです、私の娘はいわゆる『黒い赤ん坊』で産まれてきたんです。それでその娘が結婚して、数年前に私の孫が産まれたんですが、やっぱり『真っ黒い赤ちゃん』だったんです。今、学校ではいじめとか、いろいろあるでしょう？ 私の娘は色が黒いことで大層いじめられたんですが、孫もまた、いじめられたりしやしないかと思うと、親として子供や孫に申し訳なくて申し訳なくて……」

そう話しながら、筆者にまで深々と土下座をして詫びる老夫婦がいた。この家族を襲ったカネミ油症は、家族全体を文字通りの「生き地獄」に陥れていた。

福岡県在住の父(六五歳)は、肝臓の健康状態を知らせる「γ-GTP」の値が何と一三〇〇を超え、医師たちを心底驚かせたこともある(正常値は〇から四〇)。とうに死んでも不思議はない値だ。このように、現代医学では計り知れないことが起きているのが、このカネミ油症の特徴。それに加えてこの父は、甲状腺ガン、脳梗塞を立て続けに患っている。

母(五七歳)は、三年間に三回も脊髄の圧迫骨折を繰り返し、身長が六センチも縮んでしまった。おかげで一日の大半をベッドの上で過ごす。彼女は五〇代の後半を迎えた今もなお、体のあちこちにできる吹き出物と、その「臭い」に悩まされ続けている。

この老夫婦には四人の子供がいる。長男(三五歳)は歯並びが無残なまでにガタガタで、長女(三一歳)は自律神経に異常をきたし、頭痛と吐き気に現在も苦しめられている。次女(二九歳)と次男(二七歳)は原因不明の手の麻痺にしばしば襲われ、その上、長女は乳児性、次男は胎児性の「黒い赤ちゃん」だった。特に長女は、その地域で見つかった「黒い赤ちゃん第一号」だったため、新聞社の取材が殺到し、ことさらセンセーショナルに書き立てられるという「報道被害」まで味わっている。今ではだいぶ色が抜けて目立たなくなっているものの、子供の頃の皮膚の黒さは陽に焼けた健康的な黒さからはほど遠い、ま

るで死んだ人の皮膚の色のような「青黒さ」だった。

長女は小学校低学年の夏、「校内日焼け大会」で優勝してしまったこともある。しかしその際、「事件」は起きた。優勝を妬んだ無神経な父兄の一人が、聞えよがしに

「地黒がいちゃあ、勝てん」

と叫び、畳み掛けるように

「その地黒はどこにおる？」

との声が親たちの間から沸き起こる。そして一人の母が、

「ここにおるやないか！」

と言いながら、何の罪もない長女を指差した——というのだ。それも、蔑視の視線とともに。皆、長女がカネミ油症の被害者であることを知った上でのことだった。その場に居合わせた父は、当時を振り返ってこう語る。

「それで私は娘に優勝を辞退させたんですね。そしてその翌年、『また学校の海水浴があるけど、行くか？』と娘に聞いたら『お父さん、私行かない』って。どうしてって聞くと『また、悲しい思いをするから』と……。こんな言葉、小学校低学年の子供の口から出てくる言葉じゃない。それほどショックを受けていたんでしよう。辛い思いをさせてしまった。娘には本当に申し訳ないと……」

その翌年から長女は自律神経に異常をきたすようになり、一か月に一度は頭痛や吐き気に苦しむようになった。特に疲れた時などは目を開けているのに何も見えなくなることさえあった。医師からは「大人になったら治る」と言われていたが、その症状は三〇歳を過ぎた今も続いている。

そんな長女も数年前に結婚し、今では二人の子の母親となった。ただ、二人目の子が「黒い赤ちゃん」だった。結婚する際、相談した医師からは「まず、子供に影響はないだろう」と言われていたにも拘らず、である。長女はこう話す。

「一人目の子がそうでなかっただけに、肌の色がやっぱ黒いと……。産まれたばかりの赤ちゃんって肌の色が赤かったりするけど、それとは全然違うんです。その子は今、小学生なんですけど、まわりの友達からはやっぱ

り『黒い』って言われているみたいで。大きくなるにつれて何か黒さも増しているような気が……。

でも、油症のことは誰にも話してません。本人にもまだ話してない。今ほどにかく元気なんですけど、いつかこの子が自分と同じようなじめに遭わないだろうかと、私と同じような病気が始まらないだろうかと、それはもう気になって気になって……。

それに、自分の両親を見ていると、それこそありとあらゆる病気に罹^かっているし、しかも原因がよくわからない病気が多いんです。『油症が原因だ』ってわかれば、根本的な治療法も開発されるのかもしれないけれど……。今、テレビで盛んに『環境ホルモン』のことが言われているし、それを見ていると自分たちの体の中に今もある化学物質がいかに悪いものだったのかをつくづく思い知らされるんですよね。だから自分もこの先、どんな病気に罹るのかなっていう不安もあるし……」

これが、事件発生から三〇年が過ぎたカネミ油症患者たちの「現在」である。PCB中毒やPCDF中毒の完璧な治療法でも開発されない限り、油症被害に終わりはない。

ところでこの一家の場合、揃って「油症患者」の認定を受けているが、孫たちはまだ認定申請をしていない。また、差別と偏見の視線が子供たちにまで及ぶのを防ぐべく、孫はおろか自分の子供にすら「油症被害者」であることを告げていないケースも少なくない。よって現在、第二、第三代まで含めたカネミ油症被害の全体像をつかむことは事実上、不可能になっている。

自殺しかねない

「悩み」の数々

これまで油症被害者たちの間で確認されている、PCBやPCDFの内分泌攪乱作用が原因ではないかと疑われる症例を整理しておく、と、

① 肛門の開いていない子供の誕生。

② 「副腎性器症候群」などのペニスの奇形

③ 生理不順や性ステロイドの減少など、女性

の性功能障害。

- ④性欲の減退や、異常なまでの亢進^{こうしん}。
 - ⑤性ホルモンを分泌する「副腎皮質」の奇形。
 - ⑥大陰唇の肥大やクリトリスの突出。
 - ⑦そして「黒い赤ちゃん」の誕生。
- などである。ただし、ここで紹介した症例はあくまで「確認例」であり、まだ闇に埋もれているだけの健康被害もきつとあることだろう。すなわち、PCB中毒やPCDF中毒は事件発生から三〇年経った今でも「未知の疾病」のままだ。

しかし、これだけ深刻かつ、残酷な被害が続出しているとみると、被害者の口が重くなるのも当然の話である。自殺者の中には、こんな障害を苦にして……という者もいたに違いない。

人に言えない悩みばかりを抱えて生きる――。「カネミ油症」とは、そういう事件だった。

では、これほどの惨劇が発生していることに對し、国は何をやっているのだろうか。

「水俣病では人間の前に猫が死んだわけですが、カネミの油症では人間よりも前に、まずニワトリたちに出たんですね。農林省（現在の農水省。以下、コメント部分以外では「農水省」とする）が調べたら、養鶏場で死んだニワトリは大阪から長崎にかけて七五万羽にもなっちゃったです。そんなにニワトリが死んだ時、『人間も危ない』と農林省がカネミを止めてたら、患者は一人も出なくて済んだわけですよ……」

と、福岡県在住の油症患者、紙野柳蔵さん（八五歳）は語る。人に油症が現れる前にニワトリの大量死事件が起きていた――。これが世に言う「ダーク油」事件である。

カネミ倉庫製食用米ぬか油の「副産物」である黒い油（ダーク油）を混ぜた餌を食べたニワトリたちが大量死したため、農水省が調査したところ、その原因がカネミ倉庫製「ダーク油」であることを突き止めた。ところが農水省はあくまで「ニワトリの事件」と考え、そのおかげで厚生省（現在の厚労省）も「人間の事件」になるとは考えなかった。そしてそれから数か月後、人間にも被害が出ていることが明らかになったのである。被害者であ

る油症患者たちが裁判で国を訴えたのは言うまでもない。

農水省はこの裁判の第二審等で敗訴し、判決に従って賠償の仮払金約二七億円を患者たちに支払った。しかし、あくまで徹底抗戦の構えを崩さない農水省に對し、患者たちの間には、「最高裁では国に負けるのではないか……」との不安が広がり、患者たちは最高裁で審理中の一九八七年、農水省への訴えを取り下げる。「まさか国が『カネを返せ』とは言わないだろう」という読みもあった。

だが、そんなほのかな期待を裏切るように、農水省は訴えの取り下げから一〇年後の一九九七年、患者やその相続人に対し、支払った賠償仮払金を返還するよう全国各地の裁判所を通じて申し立てた。つまり患者たちは今、国から取り立てを食らっているのだ。その結果、患者たちの中からは離婚に追い込まれた夫婦や自殺者まで出ている。国は救済するどころか、患者たちの悩みを増幅していた。

油症被害者は
われわれの未来の姿

この「取り立て」を担当した農水省畜産局流通飼料課に訊いた。

「確かに、ご自身が油症であることを親から知らされていなかった子供さんに請求をして揉めた事例もございましたけれど……」

――ならば、離婚した夫婦や自殺者が出ていることもございすよね？

「これが原因で自殺されたのかはわかりませんが……。亡くなられた方もいらつしやるとは伺っています。離婚の話は、結婚する前に被害に遭われたことを相手に黙っている方も結構いらつしやいます。そういう場合は手紙が直接、自宅に行かないよう努めてはいったんですけど……。間違った手続きをしてしまったことは確かにございました。患者団体の代表者の方からも非常に叱られました」

――食品公害事件で被害を受けた上に、こんなことにまでなってしまうというのも実に惨い話だなと。

「確かにその通りでございますね……。その後は非常に注意を払いながら調停をさせていただいたんですが、(賠償仮払金は)税金からお支払いしているわけで、債権の放棄ができないんです。それに、例えば最高裁まで争って、国が勝った場合にも返還問題は生じるわけです。まあ、国が負けてしまえばよかったのかもしれないですけど……。」

私どもも現地で被害者の方々から、非常に無残な話をいろいろお聞きしております。それだけに、われわれ事務的に債権の処理をする者にとりましても非常に辛い仕事でした。それこそ、超法規的に国会で『債権免除』の判断が示されでもすればよかったんですけど、それもないままズルと債権だけが残って……。だから法律的にやむなく請求した——というのが実態なんです。

※

国会議員も大臣も弁護士もそしてわれわれジャーナリストも、油症被害者たちを本気で救う気がなかったのだろう。だから、今日の日本の話とはとても思えないような、こんな前時代的な悲劇が起きてしまったのだ。そしてその「ツケ」を払わされる日は、意外と近そうである。

「三〇年経ってもまだ油症患者の体内にPCBが残っているなんて……。そんなことは事件当時、誰にもわからなかったんですよ。しかも、そんな油症の人たちが体内に抱えるPCBの量と、油症にまったく関係ない普通の日本人から検出されるPCBの量を比べると、今やもうあまり変わりはないんですね。ということは、普通の人たちからいつ、油症患者と同じような症状が現れてきても何の不思議はない——そういう問題になってしまったわけです」

と語るのは、事件発生当初から油症被害者たちに向き合ってきた、第一薬科大の増田義人教授。カネミ油症から学ぶべきを学ばなかったおかげで、わが国の「環境ホルモン」汚染はそこまで進んでしまったのである。つまり、民族挙げての「環境ホルモン人体実験」が現在、この日本列島で進行中なのだ。油症患者たちの味わった苦しみは、もはや誰にとっても他人事ではない。

それだけに、まず、彼ら油症患者たちを救うことこそが、すなわちこの国の未来を救うことにもつながる——と筆者は確信する。きっと、まだ間に合う。

配信元：ルポルタージュ研究所

Copyright (C) 明石昇二郎

URL : <http://www.rupoken.jp/>